

日本人による初期のゴルフ場建設とゴルフ クラブ組織設立に関する歴史的研究

代表者 嶋谷 誠 司

1 本研究の目的

日本最初の日本人のためのゴルフ場といわれている「東京ゴルフ倶楽部」には、その設立に関した数々の資料が保管されている。しかしこれらは、歴史的に重要な資料でありながら、その事実関係については詳細な究明がなされておらず、日本のゴルフ史、特に日本人のためのスポーツクラブの設立やゴルフ場の建設、ゴルフ協会などの団体の設立、等の経緯は明らかにされていない。

この点から、本研究の目的は「東京ゴルフ倶楽部」の創立、開場に関わる歴史的資料を公にすることであり、ゴルフ場建設とメンバーシップ制スポーツクラブの成立過程を明確にすることである。また同時に、日本ゴルフ協会や日本で初めてのゴルフ競技会など、日本のゴルフの普及過程についても明らかにすることである。

こうして日本の初期のゴルフ史が明らかにされることは、同時にそれらを援助してきた人物や法人など周辺の関わりをも明らかにされることになり、当時の社会情勢との関わりが見えてくるという点で、スポーツマネジメント、スポーツ文化学・社会学としても重要な課題である。

2 研究の進捗状況

本研究は、次の6名のメンバー（外部専門家を含む）によって実施されている共同研究である。

研究会メンバー 代表者 嶋谷誠司
小松幸円、竹腰 誠、松下高信(金城大学)、

福島 靖(社団法人日本ゴルフ協会)、
青木香須夫(社団法人東京ゴルフ倶楽部)

これまでの研究では、7万枚に及ぶ個人メモや手紙および議事録や契約書の整理と、5万枚に及ぶ写真等のデジタルデータ化に多くの時間が取られた。所蔵主の東京ゴルフ倶楽部が10年前から整理を始め、我々も6年目から少し関わることとなったが、この2年間も殆どその作業に追われる結果となった。

大正時代から昭和時代の後期に至るものの多くは整理できたようだが、それ以降未だに整理の付かないものが残る結果となってしまっている。

3 研究の中間的成果

断片的ではあるが、上記資料を整理しつつ読み取ってみると、多くの貴重なメモや資料の存在を確認することが出来た。特に故小笠原勇八(ジャーナリストからゴルフ史研究家)のインタビューメモ(以下、小笠原メモ)は、創設に関わる大切なものが含まれていた。

まず、最も重要な時期と見ている「クラブ組織設立の発案」については、海外でのゴルフ経験者が日本国内でも行いたいという欲求に駆られたことに始まると推察できる。当時留学や仕事上の派遣などで、特にニューヨーク在住でゴルフに見せられた人物が先駆者となる。当時日本でのゴルフ場は、神戸の六甲と横浜の根岸など在外外国人専用の場所しかなく、自由にゴルフをすることは出来なかった。このことが、「日本人による日本人のためのクラブ」を作ることによってゴルフを通じた社交機関を得ようとする発想につながったものと思われる。

この時のキーマンと思しき人物は数人いたが、特に「井上準之助」(当時横浜正金銀行頭取)、「樺山愛輔」(当時日英水電社長、明治の第一代帝國海軍大将子息)、「荒川新十郎」(当時横浜生糸社長)らが樺山氏の御殿場の別荘で語らい相談したことが、樺山愛輔の孫樺山典和氏へのインタビューから明らかとなっている。さらに典和氏は、この3人が虎ノ門にあった東京倶楽部にて27名の仲間を誘って東京ゴルフ倶楽部を創ったことを、いずれも愛輔氏の子息で典和氏の父である丑二氏から聞いている。また、御殿場の別荘にてゴルフのショットに興じる写真が残されているが、富士山に向かって背景の富士山のサイズから推測される距離感や、愛輔氏の令息である白洲正子による写真ということもあり、御殿場に3人が集まりゴルフを真

似たという事実はあったものと考えられる。付け加えて、鍋島直泰氏が、樺山氏が御殿場に田舎家(別荘)を持っていたことを、庭に植えられていた楓樹の新緑と紅葉が見事であったと表して、御殿場の別荘の存在を証明している。こうした状況証拠から、この3人が事実上の発案者として御殿場から「東京ゴルフ倶楽部」が始まったと考えられる。

3人だけの出資金では、到底ゴルフ場を作れるものではなく、そこには資金集めという作業が必要であったに違いない。このことに関しては、次の事実が分かった。

東京倶楽部という社交クラブの会員を誘い出資者を募ったことは、森村開作氏(当時森村組取締役、昭和8年市左衛門襲名)が会報「知々夫」の創刊号の座談会で、「…駒沢の東京ゴルフ倶楽部の発起人として(東京倶楽部の)会員に手紙を出したのはこの3人だった…」と語っていることから確かであろう。小笠原メモによると、その出資者は以下の人物であった。前述の3名、井上、荒川、樺山以外は、西園寺八郎(当時内閣総理大臣秘書官兼大蔵大臣秘書官)、森村開作(前述)、高木謙二(当時東京病院内科主任、医学博士)、川崎肇(当時日本火災保険取締役会長、川崎貯蓄銀行常務取締役)、朝吹常吉(当時三越呉服店常務取締役)、松平慶民(当時の職業は未確認)、加藤?泰道?(文字及び属性共未確認)らが明らかになっている。この他に、岩崎家(三菱合資会社関係)、三井家(三井合名会社関係)に関わる名前が出てくるが、出資者なのかその後募られた倶楽部の会員なのかは、現時点では明らかではない。

こうして大正2年(1913年)12月8日に創立総会によって東京ゴルフ倶楽部が創立されたことが、小笠原メモから見て取れる。

ちなみに、そのメモの下行に「コース設計はブレディ、コルチェスター」と記されており、この両名もこの時期のコース作成、特に設計や人事などに一役買っていたことが伺われる。

コルチェスター氏は保険会社の勤務のスコットランド人で、後の第2回日本アマチュア選手権の覇者である。ブレディ氏はコルチェスター氏と同じ横浜根岸のメンバーであり倶楽部キャプテンで、この両名が駒沢のコース設計に当たった。キャディーマスター兼プロも根岸の山田(詳細不明)を廻すなど、当初の東京ゴルフ倶楽部のスタートにとって重要な役割を果たした人物である。

4 今後の研究課題

この他にも部分的に明らかとなった事柄もあるが、この紙面では初期の重要な事

実のみの記載とした。

今後、この創立期では、出資者の確認と初期の会員の確認や、コースがオープンし第一球目が放たれたことの確認などが課題である。

また、次に重要な点と考えていることは、財務に関する経営計画とその実施状態である。メモの一部から、井上の発想として、駒沢のコースが借地によるものであったため、出資金を運用し、預金利子や公債の購入などによって、来場者収入が目標を下回っても、会員の負担なく利用できるよう工夫されたことが伺われる。このあたりのことが今後明確になることは、非常に興味深いところであり、その結果によっては、現状のゴルフ場経営にも一助となるような妙案が見出されることも期待したいところである。

時代背景として、世界大戦をまたぐことから、日本国内での外来スポーツの統制に巻き込まれたことも推測され、また、その時期の配給制度、特にゴムや金属類がコントロールされた可能性も推測される。当然敗戦後の占領時代から、戦後復興と並行しての倶楽部とコースの再開やゴルフ振興など、多難な時代を経ることになる。そうした状況を先人たちがどう乗り越えてゴルフという文化を守ってきたのか。こうした点が明らかになることもスポーツマネジメントの側面から興味深いところである。

今後多くの歴史的事実が明らかとなってくることが期待され、非常に楽しみな共同研究となっている。